

ヤンデ練習

人々氷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いろいろなヤンデレを少しづつ書いていければいいなど

目次

片隅 : 1	39
負目 : 3	23
負目 : 2	12
負目 : 1	1

負い目：1

政略結婚、というほどの規模ではないけど、僕の結婚はほとんど損得勘定で決まった。

自慢じゃないが、僕はちよつとしたお金持ちだ。そんなに大金を持っていてるわけではないけど、同じ大学を出たての世代の中では抜きんでてると思う。正直一回り上の世代の平均も超えていると思う。

高校生の頃からコツコツゲームを作ったりホームページ作成やらなんやらのネット上のお仕事を引き受けたりしているうちに、安定した収入を得られるようになった。

足が悪くて車椅子に乗っている僕でも自分の力で働いて生きていくことができるようになったんだから、いい時代に生まれたなと思う。

稼ぎがちゃんとおあるんだから、一人暮らしをしたいと言って大学卒業と同時に小さな家を借りて一人暮らしすることにした。お手伝いさんとか雇うくらいの余裕はあるし、一人で生きていけるという自信があった。

ただ両親はどうしても心配だと言って譲らなかった。何かあった時に一人じゃどうしようもないだろうって、まあその心配はわかるけどさ。お手伝いさんでも夜とかはいなくなっちゃうからね。

そこで両親が提案したのがお見合いだった。正直まったく意味が分からなかったし、最初は僕も猛反発した。

お見合い結婚っていつの時代の話をしているんだと。そもそもお手伝いさんじゃ不安だからお嫁さんを付けようって考えが前時代的すぎる。今は自由恋愛の時代だし、お嫁さんはお手伝いさん代わりに考えるもんなんかじゃ断じてない。そういつて譲らなかった。どうかお見合いとかそんな話どこから持ってくるんだよと。

そうやって主張すると母親が詳しい事情を教えてくださいました。

お見合いの相手として考えていたのは両親の共通の知り合いの娘さんらしい。名前は美月さんで、歳は僕と同じ。

どうもシングルマザーの家庭で、一人っ子の美月さんを育てるのも

かなりの苦勞があつたとか。

特に金銭面で困窮していて、なんとか高校は卒業させてあげられたものの、大学に通わせるお金まではなかったそう。美月さんは高卒で事務系の仕事に就職していた。

だけでも、お母さんとしては美術系の専門学校に通わせてあげたかったらしい。小さい頃から美月さんはずっとデザインの方面に興味があつたんだとか。

どこかでお金の工面さえつければすぐにでも通わせてあげたいと。

そういう話を前からうちの両親は聞いていたんだそう。

そこで白羽の矢が立ったのが僕だった。なんかあいつそういえばやけに稼いでないか、と。

たぶん一人養いつつ安めの専門学校に通わせるくらいなら割と余裕で出来そうなくらい稼いでないかと。

ただでお金を出すんじや受け取る側も心苦しいだろうけど、お若い同士なんだし結婚させちまえば良いんじゃないかと。

実は僕が一人暮らしはどうこうを言い出す前から少し考えていたらしい。

そんでもって僕が一人暮らしをしたと言い出したもんだから、もう両親にとつちや渡りに船みたいなものだっらしい。

滅茶苦茶人の良い知り合いの、その娘ってんなら安心だし、うちの息子も人畜無害で特に悪いところはない。

金が無くて困ってるもんと、金はあるけど見てくれる人がいなくて困ってる（困ってないと主張はしてたけど）もん同士なら丁度いいじゃないかと。

お見合いを提案されたのはまあそういう事情だったらしい。

いや、なんやかんや言ってもそれってお手伝い扱いしてんじゃないのかいろいろ思いはした。だけでも僕の特にまだ使う当てのないお金が誰かのためになるならいいかなとも思った。

結局のところ、多分僕も心のどこかに結婚したいという気持ちがあつたんだと思う。

お金に困ってるだけなら無償で出すよ、とかそんなかつこいい言葉

は出てこずに、とりあえずお見合いするだけなら、と承諾してしまっ
た。

それから三年が経った。いやー、三年というのは長いようであつと
いう間ですね。

お見合いはどうなつたかつて、まあ最初の発言の時点で分かつてる
と思うけど結婚しましたね。

もうね、こちらとしては即決でしたよ即決。なんせ美月さん美人だ
し。滅茶苦茶サラサラできれいな黒髪ロングが最高です。そんで話
とかも合わせてくれるし、もうころりとやられましたね。

向こうとしても僕は可もなく不可もなくといったところだったみ
たいで、夢を叶えるチャンスとしては十二分というところ。お見合い
からとんとん拍子に進んで結婚させていただきました。

本当にもう早いようで三年ですよ。

まあ特に何の進展もないんですが。結婚が墓場に例えられるのは
ゴール地点だからなんですかね。

多分他のご夫婦さんたちは関係の進み切った先で結婚されている
でしょうから問題はないと思うんですが、僕はそうはいかないわけ
で。

本来スタート地点である初対面が実質ゴールになつちやつてるの
で困り果てております。

三年たつても初々しいとか言えばまあ悪くないようだけど、本当に
初対面から僕と美月さんの関係はほとんど変化していない。

まあ正直最初の二年は仕方ないよ。美月さん専門学校にかかりつ
きりだったし。二年で卒業できる美術系の専門学校つてすごいなと
思っていたらそれだけのカリキュラムが組んであった。

文字通り朝から晩までつて感じで、僕を見る美月さんと言えば朝の
ちよつと眠そうなところと帰つてきて疲れ果ててるところぐらいな
もんだった。

むしろ家で働いてる僕の方がよっぽど暇つて感じで、炊事洗濯は僕
の担当だった。

美月さんは申し訳なさそうで、何度も私がやりますとは言ってくれ

てたけどね。あんなに大変そうな様子を見てて炊事洗濯までさせるなんて、どれだけ心を鬼にしたらできるんだろうか。

実際聞いたところ、その学校は実家通いの人がほぼ全員だったらしい。

そんなだったからやっぱり最初の二年は仕方ないと思う。

問題はここ一年だ。

美月さんは念願叶ってデザイン系のお仕事に就職した。そのときはお互い泣いて喜んだものだ。むしろ僕の方が号泣だった。ずっと頑張っているところを見てたからかな。

就職してしまうと、かえって学校に行っていたころより時間に余裕ができていた。休みの日とかもそこそこあって、一日中一緒にいることも当然それなりに多くなった。

そしたら美月さんは本当に甲斐甲斐しくお世話をしてくれた。美人で気立てもいいのに料理も上手で、非の打ちどころが全くないことを知った。

けれども、何か進展があるかと言えばやはりない。下世話な話ナニもしてない。僕自身どうしたらいいのかよくわからないし。

せいぜい変わったものと言えば、僕がベタ惚れになったくらいだ。そりゃ甲斐甲斐しく世話してもらえば好きにもなるさ、単純かもしれないけどそんなもんだろ。

けれど美月さんの方にはあんまり変化は見られない。最初から優しげだったってのもあるけど、本当にあんまり変わっていない。

前より笑うようになりはしたけど、そりゃやつと自分の夢が叶ったんだし当たり前といえば当たり前前の話だ。

で、今に至る。やつと今に至る。いやー、長い前振り申し訳ない。こんな男の独り言を聞いてくれた人がいるなら感謝感激雨あられだ。

今日は丁度美月さんの休日で、お互い特に用がないから一日中一緒にいる日かな。

こういう日、僕の一日は枕もとのナースコールを押すことから始まる。ナースというか美月さんコールなんだけど。

「おはよう美月さん」

「おはようございます、日向さん」

押すとすぐに美月さんは僕の寝室に来てくれた。ベッドから車椅子に移るのを手伝ってもらおう。

一応一人でもできるんだけど、美月さんが、手伝うので必ず呼んでくださいね、と言ってくれているのでお言葉に甘えることにしている。

自分の部屋を出てリビングに向かうと、テーブルには朝ご飯が並んでいた。

いやもうほんと、学生の頃より多いとはいえ貴重な休日なんだからゆっくり寝ていてくれてもいいのに。

美月さんは休日は必ずこうして朝ご飯を作ってくれる。自分が作るのなんかより断然美味しいからもうありがたいことこの上ない。

というか二年間朝晩僕の作ったご飯を食べさせていたのが申し訳なくなってくる。

「今日も美味しかったです、ありがとうございます、ごちそうさまです」

「お粗末様です、日向さん、そんなにかしこまらなくてもいいんですよ」

「いや、うん、かしこまっちゃうくらい美味しかったから……」

「そうですか？　ありがとうございます」

僕自身何言ってるかよくわからない。まあ滅茶苦茶美味しかったのは事実だけだ。

それでもってまだ敬語が抜けきらない。僕は割とフランクに話せるようになってきた方なんだけど、美月さんはしっかり敬語だ。やっぱり関係に進展なんかありやしない。

「あ、日向さん、洗濯機回すんでパジャマ出しといてくださいね」

「折角美月さん休日なんだし僕が洗濯するよ、ゆっくり休んで、昨日は遅かったみたいだし」

「毎日日向さんがしてるじゃないですか、休みの日ぐらい私がします」

「いや、大丈夫だよホント、休んでなつて」

「私がします」

「いや、」

「私が出ます」

うーむ、この一年で知ったけど美月さんはなかなか頑固だ。こうなったら譲ってくれはしない。

「じ、じゃあお願いしようかな」

「はい、任せてください」

「そうだ、今日燃えるゴミの日だね、僕出してくるよ」

「それも私が出ます、一人で外に出て車にでも引かれたらどうするんですか」

「いや、さすがに大丈夫だって、僕だって車椅子長いんだし」

「私が出ます」

「あ、はいお願いします……」

今日も美月さんは働き者すぎて困る。休日になると毎度のことなんだけど、申し訳ないったらありやしない。

そろそろゴミの回収車が出る時間だったので美月さんはゴミを捨てて行った。

さて、じゃあ僕は食器を洗おうかな。せめてこのくらいはしないとね。

なんて考えていたら、美月さんが背後にいた。全然気付かなかつた。そこそこ重そうなゴミがあつたと思うんだけど、あつという間に捨ててきたみたいだ。

「日向さん何してるんですか？」

「え、あ、いや、食器を洗ってるんだけど」

僕の車椅子はやたらとお金をかけてあるので、割と自由に椅子の高さを変更することができる。なので普通のキッチンでも問題なく作業できるんだけど。

「危ないじゃないですか、それも私がやるので日向さんはゆつくりしててください」

「大丈夫だよ、普段からやってるし危ないことないって」

「いいんです、私がいるときくらい私を頼ってください」

「いやでも、少しくらい僕も何かしないと申し訳ないし……」

「いいんです、私を頼ってくださいってば」

そういつて数少ないお仕事を奪われてしまった。

まあこうなるのはわかってたんだけどね。休日の美月さんは本当に働き者で何でもしてくれてしまう。休日とはって感じた。

ここ一年ずつとこうだし、正直申し訳なさでいっぱいだ。

僕が車椅子で、何をするにも多少人より苦勞が多いから、美月さんはこうして何でもしてくれる。僕の足がちゃんと動けばなって思ってしまうのは何年ぶりだろうか。

そんなこんなで今日も一日は過ぎていく。

昼ごはんも僕は微塵も手を出せないし、気付いたらおやつなんかも作ってくれてたし、本当に美月さんには頭が上がらない。

夕方くらいになったころ、急にインターホンが鳴った。ほとんど誰も訪ねてこないうちにはかなり珍しいことだ。

雨が降りそうってことで美月さんは干した洗濯物を取り込んでるし、僕が出た方が良さそうさ。

インターホンの画面をのぞき込むと、あまり見覚えのないスーツ姿の女性がいた。

「はい、どちらさまですか?」

「銀天堂の和田といいます、鈴村先生のお宅で間違いないでしょうか」

「あ、はい、鈴村です、何の御用でしょうか」

「この間依頼させてもらったゲーム開発のお礼に参りました、一応メールでのやり取りはされていると思うんですが、改めて直接お礼をしようかと」

「あ、どうもわざわざありがとうございます、今行きますね」

どうやらこの間ゲーム開発の手伝いをさせてもらった企業の人のようだった。わざわざお礼をしに来るとは。

まあ在宅ワークがほとんどだし、他の社会人と直接話す機会は結構貴重なので、こちらとしてもありがたい。

さて玄関に行こうかなと動き出そうとすると、

「知らない女性の声でしたんですが、どなたですか?」

気付けば美月さんが後ろに立っていた。

洗濯物取入れに行つたの割といさつきだったと思ふんだけど、もう終わったんだらうか。優秀すぎる。

「どなたですか？」

ちよつとびっくりして答えに詰まっていると美月さんが再度聞いてきた。なんかちよつと緊張感がある。

「えつと、銀天堂の人みたい、こないだあそこのゲーム開発に携わつたから、そのお礼を言いに来たみたいで」

「そうですか」

「うん、あ、待たせてるから早くいかなきゃ」

「私が行きます」

「あ、いや、僕の仕事関係の人だしね、僕が行くよ」

「私が行きます」

「う、うんじゃあお願いします」

休日の美月さんは本当に僕を働かせてくれない。うーん、礼儀とかあんまりわからないけど、ここで僕が出なくてもいいんだらうか。

考えても仕方がないので素直にリビングで待つことにした。

あ、せつかくだしお茶でも入れようか。和田さん何か持ってきてたし、多分お茶菓子か何かだらう。一緒に食べてゆっくり話をするのもいいだらう。いつもの晩御飯の時間までまだ少しあるし。

そう思つて三人分のお茶を用意したんだけど、和田さんどころか美月さんも戻つてこない。

まさか玄関で僕抜きで話し込んでるわけもあるまい。どういうことだらうか。

気になつて玄関に向かうと丁度美月さんが戻つてくるところだった。あれ、一人だな。

「あれ、美月さん、和田さんは？」

「お帰りになられましたよ」

え、そんなことつてある？僕に用がありそうだったのに。いやまあお礼だけだからそんなに大したことじゃないだらうけど。わざわざ家まで来て会わずに帰るつてのも不思議な話だ。

まあ帰つたんなら仕方がないか。

「あ、そうなの、それならまあいいんだけど」

「はい、ところで、お茶入れたんですか？ 言ってくれたら私がいましたのに」

「和田さんが上がっていくのかなと思って入れたんだけど、いらなかったみたいだね」

「そう、みたいですね」

折角なのでこないだ通販で買ったお茶菓子を出して二人でゆっくり食べた。二度目のおやつだけどまあいいかな。

美月さんは僕がいつの間にお茶菓子を買っていたのかが気になるみたいだった。いやあ、ネットって便利ですねえ。

さて夜も更けて問題の時間がやってきた。風呂です。

お察しの通り美月さんはお風呂も手伝ってくれようとするんだな。でもさすがにこればかりは譲れない。

夫婦なんだからいいだろうと思うかもしれないけど、いやもうこれまで任せてしまったらどうなることやら。

そりや何かしらの進展になればいいけど、多分そうじゃない。こうして美月さんの休日に甲斐甲斐しくお世話されるたび思うけど、なんというか夫婦間の協力というより介護されてるみたいなんだ。

こう、美月さんから義務的なものを感じるというか。

やっぱりお金と引き換えに僕のお手伝いを、みたいなのが発端で結婚したから美月さんにもそういう意識があるんだろうか。ちよつと寂しいし、何より申し訳ない。

とにかく、風呂までお世話されるようになったらそりやもういよいよ介護じゃないかと思うわけで。

だもんで今日も何とか一人でお風呂に入っている。さすがにもう慣れたもんで特に問題はない。というか平日は普通に一人で入ってるし。

しかし今日の美月さんは一段と押しが強かった。普段の倍くらい押し問答をした気がする。どうしたんだろうか、普段の休日と違うことは特になかったけど。

そしてやつと一日が終わる。さー、布団に入って睡眠を、と行きた

いところだが、なぜか美月さんが僕の枕元から動かない。

ベッドに移るのを手伝ってもらってからそのままだ。普段は挨拶をしてすぐに美月さんも寝室に戻るんだけど。

「美月さん……?」

「はい、どうしました?」

「あ、いや、むしろ僕が聞きたいんだけど、どうかした?」

「……………いえ、特に用がある訳ではないんです」

はてさて本当にどうしたんだろうか。明日は美月さんも仕事だし、早めに寝た方が良いと思うんだけどな。

「あの、私明日から朝ご飯作りますね、二人分」

唐突にそんなことを言う。え、いや、休日は毎回作ってもらってるし、流石に申し訳ない。

平日は朝が早くて美月さんは朝ご飯を作っていない。美月さんはフルーツミックスみたいなのでかるく済ませて、僕は美月さんを見送った後適当に作って済ませている。

「いや、大丈夫だよ、美月さん朝早くて大変だろうし、むしろ僕が作ろうかってぐらいなんだけど」

特に女性は朝からいろいろ準備しないとイケないから大変そうなのに。

「いえ、大丈夫です、少し早く起きれば済みますし」

「睡眠が一番大事なんだよ、それに休日こんなによくしてもらってるのに平日までお世話してもらったら申し訳ないよ、本当はずっと家にいる僕が朝ご飯作るぐらいはするべきなのをしてないんだからさ」

「そう、ですか、わかりました」

何とか納得してくれたみたいだった。そのまま、おやすみなさい、と挨拶して美月さんも寝室へと戻っていった。

いやあ、よかった。

本当に最近申し訳なきが募っていくばかりなんだ。

美月さんの仕事は割と収入があるみたいだし、正直僕の助けがなくてももう一人で生きていけると思う。

そうなる最初結婚した時とは状況が違ってくる。ただ僕がお

世話されてるだけだ。

今のところ生活費とかは全部僕が出してるけど、美月さんがそれも折半すると言いついたらどうしようか。一種アイデンティティーの崩壊だ。

最近休日を過ごすたびに負い目を感じるようになってる。

美月さんのことは好きだ。間違いない。結婚生活は僕からすればこれ以上ない幸せに満ちている。

だけど美月さんはどうなんだろう。好きだからこそ考えてしまうことがある。

例えば、彼女はもっと大きな幸せをつかめるんじゃないか、とか。

負い目：2

相変わらずの日々が続いている。少なくとも表面上は。

平日、僕は平日と休日の境目がなくて美月さんの平日のことだが、とにかく平日中は僕が自分の分だけ朝ご飯を作り、洗濯をし、美月さんが帰ってくるまでに風呂を済ませ、自分は使わない湯船にお湯を張り、晩御飯を作る。

夕方になると美月さんが帰ってきて晩御飯と一緒に食べる。居間でテレビを見たりしているうちに風呂を済ませた美月さんに挨拶をして互いに寝室に向かう。

そういう日々が続いている。

平日は良い、あまり美月さんに手間をかけさせることがない。

ただ休日も相変わらずだ。

朝起こしてもらい、それから夜寝かせてもらうまでひたすらお世話をされる。そりやもちろんありがたいけど、申し訳ない気持ちはどんどん募っていく。

最近はまだゆっくり過ごしていると何かとお世話をされてしまうため、なるべく仕事をするようにしている。美月さんも気を遣って仕事中の僕にはあまり関わってこない。

なんだかより一層真つ当な夫婦らしさを失っている気がするが、美月さんにお世話をさせすぎてしまうよりましだ。再三言うが申し訳ないったらありやしない。

確かにお世話と金銭的援助の交換条件で結婚したようなものだから美月さんがお世話してくれるのもわかるけど、もはや美月さんは一人でも金銭的に困ることなさそうだし、一方的に僕がお世話してもらうだけになっているような状況だ。

だから本当はここらで一度関係を見直さなくちゃいけないんだと思う。わかつてはいる。けど、言いだすことはまだできていない。

なんせ僕はもうベタ惚れだし、関係を見直そうと言い出しても離婚にでもなったら立ち直れない。

そう思っとうじうじしているから、相変わらずの日々が続いている。

る。

でも内心じや申し訳なさはどんどん加速して、それで好きになればなるほど美月さんの本当の幸せを考えることは増えていく。だから、そのうち、そのうちきつと話を切り出せるだろうとは思う。

まだ、今じゃないけど、だけど近いうちには必ず、そう思う。日々の中、少しづつは考えを変えられるようになってきている。

「いつてらっしゃい」

「はい、行ってきます」

今日もまた美月さんを見送る。

相変わらず朝は早めで、美月さんは毎日大変そうだ。多少は疲労の色も見える。

だけど美月さんはちっとも愚痴なんか言わない。たまに仕事の話聞いてみても、この仕事に就く機会をくれたことに本当に感謝しています、と楽しそうにそう言ってくれる。

そこから普段なら僕も朝ご飯を食べて、家事と仕事をする。

そう、普段ならそうするんだけど、なんとなく今日はしてみたいことがあった。

美月さんの働いているところが見てみたくなったのだ。

特に理由があったわけじゃない。ただ働いている美月さんを見てみたいだけだった。いや嘘だ、少しは他に考えていることがあった。

もし本当に、美月さんが楽しく働けているのなら、それを見て決心できるかもしれないと少し思っていた。

美月さんが僕に気を遣って楽しく仕事しているふりをしているかもしれない。その場合ならいつ仕事を辞めたくなくてもいいように今の関係性でいた方がいい。

本当に楽しくやっているならば、この先僕の援助はもう必要ないつてわかる。それがわかれば改めて関係性を見直す決心が、つくかもしれない。

だけどやっぱり関係性を見直すのが怖いから、その考えには自分でもあんまり気が付かないようにしていた。

だから実際ただ美月さんの働いているところが見てみたいっての

が動機のほとんどだ。それはホント。

勿論美月さんの職場は知っている。すぐさま駆けつけるのは僕には少し難しいけど、一応何かあった時のために職場を教えるも良かった。

家から四駅ほど離れたところにある小さめのビルがそれだ。

確か近くに喫茶店があるから、ついでにそこで朝ご飯も済ませてしまおうことにした。

美月さんは毎日電車で通勤している。

僕も車椅子で行こうと思えば行けなくはない。最近の公共交通機関はバリアフリーとか進んでるし、本当良い世の中になってきたものだ。

だけどまあ手間なのは間違いないし、朝は電車も混んでいるのでタクシーを使うことにした。

普通のタクシーじゃなくて、最近主流になってきた大きめの車椅子が積めるタクシー。これもまた便利だ。

苦手な電話を何とかかけて、待つこと数分、家の前まで来たタクシーに乗り込んだ。

喫茶店の名前を告げて出発する。そして三十分もすれば喫茶店に着いていた。すごく楽ちんだ。

次から買い物に行くときも使おうか、なんて思う。まあ近くのスーパーまで五分もかからないから完全に無駄なんだけど。

喫茶店に入ると入り口からは見えない奥の方の席に案内された。

少し広めのスペースが取られていて車いすでも楽に利用できるようになってる。これまたありがたいことだ。

外食に不慣れなものもあって注文に中々手間取り、モーニングのセットが届いたのは入店してから三十分もたってからだった。

食べながらこの後どうするかを考える。とりあえず職場の近くまで来たのは良いけど、どうやって美月さんの働いているところを見ればいいだろうか。

夫ですって言えば職場に入れてもらえるかもしれないけど、普通わざわざ妻の働いているところを見に来る夫なんていないだろう。授

業参観でもあるまい。美月さんに変な噂が立つても可哀そうだし。そもそも美月さんが自然体で働いているところが見たいんだから、ばれちゃ意味がない。

さてどうしたものか、何かいい方法はないかとしばらくうなつていた。

そしたら、美月さんの横顔が見えた。離れたところにだけど。いやもう本当に驚いた。

だって美月さんは今仕事中ははずで、多分まだ始業から一時間も経っていないのに休憩があるとは思えない。

だから僕には、美月さんが、しかも男性と二人で、この喫茶店に来る理由が皆目見当もつかなかった。

思わず僕は身を隠した。丁度こちらから美月さんの顔が見えるか見えないかくらいの位置の席に美月さんと男性は座った。

僕が座ってるのは角の席で、丁度目の前に柱がある。だから体を少し動かせば丁度美月さんから見え隠れする。

今僕がこうして隠れてのぞき見みたいにしてるのは、美月さんの自然体が見たいからってだけじゃないような気がした。

なんだか、見てはいけないものを見ているような、そんな気がしたんだ。お察しの通り、僕の頭には「浮気」って言葉がちらついていた。

さすがにどんな話をしているのかまでは聞き取れない。でも楽しいな雰囲気なのはわかった。分かってしまった。

はつきり表情が見えるわけじゃないけど、美月さんが笑ってるのは分かる。実際の生活がどうあれ三年も同じ家で過ごしたんだ。だからわかってしまう。

そして極めつけに、男性が美月さんの手を取るのが見えた。そりやはつきり見えたわけじゃない。でも間違いなく二人は手をつないでいた。

思わず美月さんの顔を注視すると、今まで見たこともないような笑顔だった。就職が決まった時よりもうれしそうな、そんな雰囲気だった。

もうそうなる僕の中の「浮気」って文字一色になっていて、指

一本動かせないくらいになっていた。

それから気が付いたら僕は家に帰ってきていた。

正直どうやって帰ってきたのか定かじやない。我にかえったら布団に寝転がっていた。つけっぱなしの腕時計が正午過ぎを指していた。

正直、正直ここまでショックを受けるとは思ってたなかった。

そもそも今の関係を見直すかべき否かを見極めるために出かけたんだ。関係を見直すって結論が出ることだって勿論、いや、ちよつとくらいは考慮してた。

美月さんの幸せのためなら、割と何でも我慢できるって、ついさっきまではそう思ってた。そのくらいには好きだったから。

だけど、実際に目の当たりにするともう頭は真っ白で、どうするのが正解かなんてちつとも見えてこなかった。冷静に、素直に予定通り身を引く方針で進めるとか、全然思えない。

でも、例え本当に浮気されていても、恨みが湧いてくる気もしなかった。だって美月さんは幸せそうな顔をしていた。あれが美月さんの進むべき道に見えた。

冷静に別れが思いつくわけでもなく、だけどひどい未練とか、恨みつらみが頭をよぎるわけではなかった。ただただ頭が真っ白なまま、幸せそうな美月さんの顔だけが脳裏をよぎった。

多分、幸せを願う気持ちが大元にあるんだなっただけは分かった。そのくらいには好きだから。それはもう、ベタ惚れだから、さ。

ご飯が喉を通る気がしなかったから、とりあえず洗濯物をする事にした。

考えがまとまらないから、とりあえず何かをしていないと気が済まない。

頭の中にぐるぐると回る離婚の文字を見ないように、ぐるぐると回る洗濯機の中を見つめた。

見る対象が乾燥機に代わっても相変わらず。

洗濯物を一枚一枚折りたたんでいるうちに、本当に少しづつだけど、落ち着いてきた。

後から考えてみると、この時は落ち着いた気になっているだけで全然落ち着いていなかった。そもそもあの誠実さが塊になったみたい。な美月さんに対して脳内が浮気一色な時点で冷静じゃない。そりゃどれだけ誠実な人でも浮気するかもしれないけど、他の可能性の方がよっぽど高いはずだ。少なくともそれが思いつかないくらいには混乱していたのだ。

とにかく、洗濯物をたたみ終わったくらいには考えがまとまりつつあった。全面的に受け入れる方針で。

すべてを受け入れるのは真実の愛じゃないだとか、手放せるなら好きじゃなかったんだとか、そういうことを言う人がいるかもしれない。

でも僕からすればそうじゃなかった。本当に好きな人には、本当に幸せになつてほしいのだ。

本当の幸せを上げられない程度の愛だとかそういう話でもない。そりゃ僕が美月さんに与えられる幸せがあるってんならもう限界まで捧げるくらいの気持ちはある。

だけどそれよりもっと多くのものを与えられる人がいるような気がした。そういう気がしてしまったんだ。

この両足が、あまりにひどく重いものだから。

そう思うとすつと腑に落ちた感覚がした。

何をこんなに迷っていたんだろうかと、そう思いさえする。

だって目の前に美月さんがもっと幸せになる手段が落っこちてるのに、それを拾わない理由なんてないんだから。

そもそも浮気でさえないんじゃないか。僕らはお金とお世話を交換するだけの関係だ、たまたま僕が相手を死ぬほど好きになっちゃっただけで。

僕が美月さんをお金で縛っていただけだ。しかもその鎖はもう形だけで。美月さんは本当ならもうすつかり自由の身のはずなんだ。

関係を見直す、というか終わりにする時だと、そう思った。

頭の中もすつかり落ち着いたような感じで、ただその考えだけが残っていた。

逆にここ最近思い悩んでいたことが全部片付いて、気楽になったよ
うな気がした。

気も晴れたし、たまには手の込んだ料理でもしようかな。

そうだ、美月さんの更なる幸せを願うサプライズパーティーをしよ
う。手の込んだ料理を作つて、それで今後の関係の話をするんだ、そ
れが良い。

冷蔵庫の中を見ると、そこそこの材料はあった。買い物に行くのも
心配されるので、基本的には美月さんが休日に買いこんできてくれ
る。

でもちよつと物足りないから買い物に行くことにした。久々の買
い物でちよつと楽しみでさえある。

車椅子でも五分とかからず来られる最寄りのスーパーで色々食材
を探す。

美月さんは割と節約好きなので高いものは全く買わない。お陰で
お金が有り余っているからたまには高級食材に手を出したつていい
と思う。

まあスーパーにそんな高級食材と呼べるほどのものもないけどね。
普段見ないような食材を膝の上にたくさん抱えて、ゆっくり家に帰
る。久々の買い物と散財するぞつていう決心のせいでやたらと買い
込んでしまった。

美月さんに買いすぎつて怒られるかもしれないけど、まあ数日に分
ければ使い切れる程度の量だろう。

家に帰つて時間を確認すると美月さんが帰ってくるまでそんなに
時間がなかった。いやなくはないけど手の込んだ料理をしようとす
るとそれほど余裕はないくらい。

急いでレシピを検索しながら料理の準備をする。

わお、ローストビーフつて炊飯器で作れるのか。便利だけどお米も
炊きたいので却下です却下。とりあえずお米を炊くことから始めよ
うかな。

夢中になって料理をしている間にどんどん時間は過ぎて、完成する
少し前に玄関で鍵を刺す音がした。

急いで玄関に向かうと、ちよつと不満げな顔をした美月さんが立っていた。

「おかえりなさい美月さん」

「ただいまです、日向さん、鍵が開いてたんですが？」

あ、買い物から帰った時閉めるの忘れてた。でもちよつと奮発した料理はサプライズにしたいから誤魔化すことにする。

「ん、仕事に行き詰って外の空気を吸いたくなっちゃってね、そのあと閉めるの忘れてたみたい」

「そう、ですか、やっぱりお仕事大変なんですね」

美月さんの不満顔がさらに不満顔になる。心配させちゃったみたいで、罪悪感がある。

「いやあ、美月さんの方がよっぽど大変だと思うけど、ところでご飯まだできてないから先にお風呂入っておいてくれる？」

「はい、わかりました、いつもありがとうございます」

そういつて美月さんは自分の部屋へと向かった。

さて、料理の続きをしよう。

美月さんがお風呂から上がるころには、すっかり晩御飯が完成していた。美月さんのお風呂はちよつと長いので盛り付けまで凝る余裕があった。

やっぱりロングヘアーってお手入れが大変なんだろうな、これまで毎日綺麗な黒髪を拝んでいられたことに感謝感激雨あられた。

「わっ、これどうしたんですか？」

食卓を目にした美月さんはそう言った。驚いてもらえたなら何よりだ。

美月さんの今後の幸せを願ってのパーティーなんだけど、美月さんは僕が今日美月さんを見たことを知らないだろうし、いきなりそれを言うとか余計な驚きまで与えてしまう。

とりあえず今はご飯を楽しんでほしいので説明は先延ばしにすることにした。

「まあ、ちよつと奮発する日があっても良いかなって、駄目かな？」

「まあ日向さんがそうしたいなら良いんですけど」

とりあえず机の向かいに座って二人で食べ始める。美月さんが作った料理ほどじゃないけどちゃんと美味しくできていた。まあそれなりに高いもの使ってるしね。

美月さんも美味しいと言ってくれて僕的にはそれで十二分だった。いやまあ毎食おいしいですって言ってくれるんだけどさ。

食べ終わって食器を片付ける前に、美月さんは足元からこじやれたワインとこれまたこじやれたおつまみを取り出した。

いつの間にそんなものを用意していたのかさっぱり気が付かなかった。

「実は今日話したいことがあってこっそり用意したんですけど、急に晩御飯奮発するって、もしかして日向さん気付いてます?」

急に頭に冷水をぶちまけられたような気分になった。いや、美月さんは全然物騒なことを言っていないんだけど、話したいことに心当たりがあつたからだ。

勿論僕も話したいことがある。この食後の時間に話そうかと思つてたんだけど、先手を取られた気分で焦ってしまう。

美月さんは僕が今日見てたことを知らないから、僕が今日話したいことがあるとは知らないはずだ。むしろ気付いてますかってこちらが聞きたい。

「いや、何のことやらだけど、でも僕も話したいことはあるよ」

とりあえずとぼけてみる。もしかしたら違う話かもしれないしね。まあ今後の僕らの話なんだとは思うけど。

まさか美月さんの方からも切り出してくるとは。三年間一緒に暮らしているうちに、ほんの少しくらいは似たもの夫婦になれたのかもしれないとか、ちよつと考えてしまう。

「そうなんですか、じゃあお互い話をする前にちよつと聞いてもいいですか?」

「ん? いいよ」

「今日、買い物行ったんですか? それともまた通販ですか?」

あ、そういえば買い物行ったことは内緒にしてたんだっけ。あれだけ豪華な料理を作ればそりや自分が買った以外のものがあることも

分かるよね。

「ああ、うん、実は買い物行ってたんだ、美月さんを驚かせたくて内緒にしてたけど」

「そうですか、じゃあ息抜きっていうのは嘘だったんですか？」

「いやまあ、うん、そうなるかな」

そんなに気にすることでもないと思うんだけど、美月さんは少し怒ったようだった。

いやでも、これからの話をすれば上機嫌になってくれるはず。

「あ、じゃあ僕から話してもいいかな？」

「はい、どうぞ」

僕の頭の中には、朝見た幸せそうな美月さんの顔が浮かんでいた。知らない男の人と手をつないでいた時の美月さんの顔が。

僕がここで関係を改めようって話をすれば、ほんのかけらだけでも、その顔を僕に見せてくれるんじゃないかなって。

そう思った。ちよつと期待さえしていた。

本当にそう思っていたんだ。

「多分美月さんも話すつもりだと思うんだけど」

「僕たち」

「別れよっか」

流石に実際口にするのはちよつと、嘘だ、かなり辛いものではあつた。美月さんの顔を見ながらは言えなかった。ちよつと横を見ながらが精一杯だった。

だけど美月さんが喜んでくれるなら、美月さんの幸せのためならと思うと、笑いながら言えた。

僕が明るく提案すれば美月さんに気負わせることもないかなって。部屋はしんとしていた。

少しの期待とともに美月さんの表情を見ようかとする、美月さんが口を開いた。

「すみません、もう一度言ってもらえますか」

「え、あ、僕たち別れま」

二回目の提案を言い終わる前に、身を乗り出してきた美月さんの手

で口元を抑えられた。

驚いて美月さんの方を向く。

美月さんの表情は、僕が期待とともに見ようとした美月さんの顔は。

無だった、整った顔だけにひどく迫力があつた。

無表情で、目元を光らせた美月さんは本当に美しかった。

でも僕が見たかったのは、あの幸せそうな顔をした美月さんだったんだ。

ほんの少し、おすそ分け程度だけでいいから僕に見せてほしかった。

美月さんの荒い呼吸だけが、部屋に響いていた。

負い目：3

「嫌です」

この言葉がずっと頭の中を回っている。

あれから数日たったけど美月さんはあの時のことに触れようとしていないし、僕もなにがなんだか分からなくなっちゃって触れられやしない。

結局僕が得られたものと言えば、美月さんの明確な拒絶と一滴の涙くらいのものだ。

僕が余分に買った食材もキリよく消費されて、すっかり元通りの生活サイクルになった。

違う点と言えば朝ご飯くらいのもの。

あれから美月さんは更に早起きするようになって、僕の分の朝ご飯も作るようになった。日ごろの申し訳なさに泣かせてしまったことまでプラスされて申し訳なさが最高潮に達していると言ってもいい状況だったのに、そこから更に足されてしまった。

唯一恩返しになりそうな提案は逆効果だったし、申し訳なさを感じるだけで返す術を失って身動きが取れなくなってしまった。

逆に朝ご飯は僕が二人分作る提案もしたけど、また嫌ですと言われてしまってそれ以上何も言えなかった。

そんなこんなで散々、いや、実際の生活としてはお世話してもらったことが増えて天国のようではあるけど、心理的には罪悪感の募る散々な日々だ。

強いて言うなら、あれから美月さんがはつきりとした意思表示をしてくれることが増えたのは良いことだろうか。意思表示というか、嫌です、なんだけど。

考えていると頭が混乱してきて駄目だ。これから僕はどう生きていくのが正解なんだろうか。

お世話されるのが申し訳なくて、美月さんがより幸せになれそうな提案を試してみたけど否定されて、じゃあせめて申し訳なさを軽減する

努力をしてみようとしたら全部否定されるときた。

どうすればいいんだろう。そのうえ美月さんとの生活を続けられることに喜んでいて自分もいて頭の中はもうぐちゃぐちゃだ。

自分勝手になれば簡単な話ではある。

申し訳なさを気にしないようにすれば、ただ美月さんと生活できるだけで十分幸せなんだから。

じゃあ美月さんの幸せって何なんだろうか。

少なくとも僕のお世話をするのが美月さんの幸せじゃないはずなんだ。もしそうなら美月さんは働いてない。僕の収入で二人で生きていけるんだから。

だから働くことが美月さんの幸せなんだと思ってた。あの日、就職先が決まった日に見せてくれた笑顔はそう思わせるには十分な笑顔だった。

そうなるって僕のお世話は障害になるはずで。与えあえる関係ならまだしも僕は人よりも手間のかかる体だ。重荷でしかない。

だから美月さんを自由に、あるいは他のもつといい関係の下へ後押しすることは美月さんの幸せにつながるはずだった。

もしかしたら美月さんからすればお世話することは金銭的援助への恩返しのもりかもしれないから、その場合美月さんからそういう提案はしづらい。

なら僕から提案すれば。僕から提案すれば美月さんには何の負い目も無くなる。

はずだったんだ。僕の想像の限りでは、美月さんの幸せはそれだったんだ。

「嫌です」

何回も、何回もそうやって考えた。何回も考えて、全部その言葉に押しとどめられた。

堂々巡りだ。僕は一步も進めない。ひたすらに同じことを考えて、結局分からなくなることを繰り返してる。時間だけが過ぎていく。

仕事も手につかなくて、適当に昼ご飯を流し込んでまた物思いにふける。

どうしたらいい、僕はどうしたらいい。

また堂々巡りの中にはまっていく。一人で考えたって進みやしないのに。

仕方がないからとりあえず晩御飯の準備をすることにした。

僕にできることと言えればせめて晩御飯を美味しく作るくらいだ。

美月さんが帰ってくるまでは時間があるけど、うじうじ悩んで時間をつぶすくらいなら少しでも美月さんのために使った方が有意義つてものだ。

最初は悩んだ末に答えが出るなら意味があると思っただけど、もう本当は分かっている。僕なんかじゃ美月さんの幸せは分かんないんだ。

料理に精を出すのは悩んでいるよりずっと楽だった。

美月さんのためになることが全部こんなに単純だったらしいのに。どうしたって美月さんのことが頭から離れないのは変わらないけど、よっぽどましな具合に時間は過ぎていった。

やたらと丁寧に作ったご飯が丁度完成したとき、玄関から鍵を刺す音がした。

美月さんが帰ってきたらしい、急いで玄関に向かうと、丁度鍵が回るところが見えた。

「おかえりなさい美月さん」

「ただいまです、日向さんこれ届いてましたよ、丁度今外で受け取りました」

美月さんが持っていた小包を僕に差し出す。

ああ、多分通販で頼んだお菓子だ。仕事の合間に食べようかと思つてたやつ。

お昼に届くよう頼んだと思うんだけど、時間指定間違つてたみたいだ。

「良い匂いがします、カレーですか？」

「ああうん、丁度今仕事が無くて暇だったから、煮込んでみたんだ、ルーもストックがあったしね」

「わ、それは楽しみですね」

美月さんは少し笑って、僕の車椅子の手押しハンドルを握った。

僕のは電動だし本当はそうする必要はないんだけど、最近の美月さんはこうすることが多い。

それで二人でゆつくり晩御飯を食べて、それから美月さんがお風呂に行くのを見届ける。

いたって平穏な時間だった。

あの日美月さんが見せた涙も、少し苦しそうな表情も、まるでなかつたかのように。

いつそ恐ろしいほどに何も変わらない日常がそこにあった。

「日向さん、お風呂入りますよ」

突然、ついさつきお風呂に向かったはずの美月さんの声がした。それも機嫌が良さそうな声が。

「え？」

「日向さん今日お風呂入ってないですよね、お風呂入りますよ」

そうだ、無駄に考え事をした後、晩御飯を作るのに時間をかけてお風呂に入るのを忘れてた。

ただ素直にそう言っていると美月さんが手伝おうとするかもしれない。というか言い方的に手伝う気満々だ。

「えっと、僕はいつも美月さんが帰ってくる前に入ってるから大丈夫だよ？」

すると美月さんは不満そうな顔をして言った。

「お風呂、乾いてますよ」

そりやそうだ、考えたらすぐ分かる。

けど流石に一緒に入るのは避けたい。これ以上お世話されてどうするんだ。

個人的にはお風呂は最後の一線だし、そこを越えたら最早介護という考えに変わりはない。

「えっと、あとから入るから先に入っているよ、美月さんも早く寝たいだろうし」

「大丈夫です、明日は休みですから」

「いや、でも疲れてるでしょ、僕お風呂入るのそこそこ手間だし、美月さんも大変だろうから、先に入りなよ」

「嫌です、さ、お風呂行きますよ」

何度目かの嫌です、だった。

僕はどうしてもこれに弱くなってしまつて、そう言われると押し黙つて従うしかなくなる。

何も変わらない平穩そうな日々で、そこだけは前と変わったのだ。そうだ、堂々巡りで一步も進んでない僕に一つだけ分かることがあるじゃないか。

美月さん、変わったんだ、嫌ですつて言うようになったんだ、僕が、思考のループから抜け出せるとしたらそこしかないんじゃないか。

というかそうだよそもそも美月さんの幸せがわかんないなら本人に聞けばいいじゃないか僕つてホント馬鹿か。

急になんだか全部クリアになつた気がして、今なら、嫌です、に正面から向き合える気がした。

「ねえ、美月さん」

「何ですか？話したいことがあるならお風呂で聞きますよ」

「ううん、ちゃんと落ち着いて話したい事なんだ、だからお風呂の前にちよつといいかな」

美月さんはあまり感情を見せない人だ。

いや、無感情とかいうわけじゃなくて、マイナスな感情を僕に見せることがほとんどない。不満そうな顔をすることはあつたりするけど、大体の場合は僕のためだ。

だから美月さんの嫌そうな顔とか、ましてや泣いている顔なんてあの時しか見たことがなかった。

でもその瞬間、僕が話をしたいと言つたときに初めて、多分本当に初めてその顔を歪めた。

それまで嬉しそうに僕をお風呂に誘っていたその笑顔が、ほんの少しだけひきつって見えた。

「……嫌です」

それから、またその言葉を吐いた。

でも違つた。ここ最近僕がお手伝いを断ろうとしたときに言われていた、はつきりした意思表示とは違つた。

どっちかかっていうと、そう、あの時のような。涙と一緒に震えた声で言っていた、あの時の。

僕はひどい奴のなのかもしれない。

このいわば追い詰めたような状況を、チャンスだと思った。

ここ最近の思考のループから脱するための。

僕の渾身の、本当に全身全霊をなげうつたつもりの一策を食い止められたあの日に、今戻れるなら。美月さんがあの日と同じ気持ちになっっているなら。

他の選択肢を出してみる、ああいや違う。僕が考えたって何にもならないんだから、美月さんに聞いてみるチャンス。

触れさせてもらえなかったあの日の続きを、聞いてみるチャンスだと思った。あとついでにお風呂回避のチャンス。

「ね、こないだはさ、ちゃんと話せなかったから」

「……やめてください」

やっぱりひどい奴だ。美月さんを困らせて。

普段あんなにお世話してもらつといて、美月さんの頼み一つも果たせない。

でも、今解決しないと。僕らの歪な関係を。

これから先でもつと困らせることになるくらいなら、お荷物になり続けるくらいなら、今一瞬困らせる方がよっぽどまだ。

「ごめんよ、でも美月さんに聞きたいことがあるんだ、美月さんには嫌な話なんだろうけど、僕には何が嫌なのかも聞かないと分からなくてさ」

「嫌、嫌です」

美月さんが、耳を塞いでいた。

罪悪感はある。そりゃ死ぬほどある。誰が好き好んで好きな人を傷つけたりするんだ。

でもここで引き下がったら、美月さんに聞く機会を失ったら、本当にどうにもならなくなるから。

一步、もとい車輪をわずかに回して美月さんに近づいた。

「嫌……」

僕が何かを言う前に、美月さんは後ずさった。

なんだかんだ美月さんから距離を置かれることって初めてで、僕も思わず手を止めてしまった。

美月さんは後ずさって、それから身を翻してお風呂に消えていった。

しばらくシャワーの音は聞こえてこなかった。

それで次の日の朝、美月さんの休日に僕はナースコールを押せなかった。

余計頭の中はぐちゃぐちゃになって、今美月さんの手を借りると罪悪感に殺されてしまうような気がした。

本当にどん詰まりに辿り着いてしまった。

僕が考えたってどうしようもないのに、美月さんと答え合わせをすることもできない。僕の申し訳なさは出口を失って、僕の中で暴れまわるしかないのだ。

それどころか僕が解決しようとするのが美月さんに嫌な思いをさせてるのもはつきりわかってしまった。

せめて美月さんに迷惑にならないように、手を煩わせないようにするのが最後に残された精一杯だ。

「おはようございます日向さん、起きたら呼んでくださいよ」

だというのに、美月さんはそこにいた。

昨日僕に怯えるように消えていった美月さんが、僕の部屋の扉を開けていた。

「あおはよう美月さん、えっと、今起きたところですよ」

昨日のことなんて無かったみたいに美月さんは普段通りで、僕は混乱して当たり障りのないことしか言えない。

「30分前くらいから起きてたでしょう、朝ごはん出来てますから冷めちやう前に食べますよ」

そう言っつて美月さんは僕を車椅子に移す。

僕は結局手を借りてしまう申し訳なさに頭がいっぱいで、美月さんがどうして僕の起きた時間を知ってるかなんて気にならなかった。

美月さんとの休日は本当にいつも通りで、美月さんの甲斐甲斐しい

お世話をひたすらに受け続けた。

とうか今までよりも甲斐甲斐しいくらいで、ちよつと動こうとすると美月さんが後ろに回り込んでいて、車椅子を押してくれた。

いつそこまできると嫌がらせでもされてるのかと思えるけど、美月さんの表情は少し嬉しそうで。それを見てしまうと何も言えない僕がいた。

それから数日の間。僕の深まる悩みとは裏腹に、何も変わらない日々が続いた。

何も変わらない日が続いて、そしてその日は唐突にやってきた。

「日向さん、お話ししたいことがあります」

晩御飯を食べ終わってすぐ、美月さんがそう切り出した。あの日と同じ曜日で、あの日より質素な晩御飯のあとだった。

本当に唐突だったから、僕はとっさに何も言えなくて、ただ頷いた。「えっと、何個か話したいことがあって、とりあえずあの日言おうとしたことから、聞いてもらえますか」

そういえばあの日美月さんも何か言おうとしてて、聞かないままだった。

美月さんがあの日のことに触れなくなさそうだったから聞けなかったけど、本人から話してくれるなら止める理由もない。

「じゃあ、その、日向さん」

美月さんは少しためらっているようだった。わざわざ話したい事なんだし、多分大事なことなんだと思う。僕は相槌を返して、それから美月さんの目をじつと見つめて待った。

「私、会社で新しく発足されたプロジェクトのメンバーになったんです、そこが結構新しいことに挑戦していて、今会社にいる人たちだけでは出来ないことも必要になってくるんです」

意外にも、いや別に話の内容を予想してたわけでもないんだけど、それは仕事の話だった。

美月さんは仕事のことを聞いてみても、楽しくてここに就職できたことを感謝してる、くらいしか話してくれなかったから仕事の内容を聞くのは初めてだ。

「それで、プログラミング周りのこととかもそのうちの一つで、今から会社で人材養成するより、外注するとか実績ある人に声をかけてみるのが良いんじゃないかって話で」

ああ、だんだん話が分かってきた。それでお仕事の話を僕にしてくれてるのか。

「それで、日向さんにそう言った依頼をさせてもらえないか聞くつもりだったんです、あの日は」

「なるほど、そういう話なら全然大丈夫だよ、今は特にどこからも依頼されたりもしてないし、時間はあるから」

「ありがとうございます、でも、その前にまだ聞いてもらいたいことがあるんです」

あ、何個か話したいことがあるって言ってたのは全部仕事関連のかな。それだったらわざわざ話すのを避けて数日空けてから切り出すことでもなさそうだけど。

「その、日向さんに」

今度は少しじゃなくて、結構ためらっているようだった。少し逸らしたり見つめてきたりする美月さんの視線に向き合いながら、僕は美月さんが言い出すのを待った。

「新プロジェクトってかなり力を入れてるみたいで、お給料もすごくよくなったんです」

少し本筋から離れたところから話し始めたような感じだった。でもそれは割と僕にダメージのある話で、いよいよ美月さんとの関係性が歪になるのを感じた。

「それで、その、日向さんに」

本題に入るのはやっぱり躊躇っているようで、一度美月さんは顔を伏せた。

それからゆっくりと顔を上げると、さっきとは違って、真っ直ぐな目線が僕を捕らえた。

「日向さん、仕事、辞めてください」

「……え？」

何を言われたか全然わかんなくて、思わず聞き返してしまった。

「日向さんに仕事を辞めてほしいんです」

でも二回目も全く同じ内容で。僕が聞き間違えたわけではないことが分かった。

え、本当にどういうことだ。普通に話の流れが分からない。

戸惑っている僕とは正反対に、どうやら何かの覚悟を決めたらしい美月さんは落ち着いていた。

「そんなに悩まなくても大丈夫です、どちらにせよ結果は同じですから」

「それで、私が話したいことは終わったので、日向さんが話そうとしたこと聞かせてもらってもいいですか」

この間の表情と違って、美月さんは真っ向から僕の話に向き合う姿勢を見せてくれた。果たしてこの数日に美月さんに何があったんだろう。

いや正直美月さんの話が呑み込めなくて頭の中はクエスチョンマークでいっぱいなんだけど、とりあえずここ数日逃し続けてきたチャンスをもたらえたことは分かった。

美月さんが向き合ってくれたのに応えなくちゃという思いで、僕はまとまらない頭から少しづつ言葉を吐いた。

「その、美月さんにはお世話になりっぱなしで」

「結婚したときみたいに美月さんが僕の助けを必要としているわけじゃないし」

「美月さんには、もっといい相手がいるし」

「別れたいわけじゃないんだよ、でも別れたいんだ」

「幸せに、幸せになってよ、美月さん」

何日考え込んでもしどろもどろにしか話せない僕が嫌だった。

僕が幸せにするって言えない自分をまた見つけてしまった。

考えていたことの本当の最低限しか言えなくて、逃げ出したくなる。

「でもそれだけが、僕にできることだと思ってたけど、美月さんには嫌がられちゃって」

「だから、どうして良いか分からないんだ、美月さんがどうしてほしい

のかもわからなくてさ」

「どうしたらいいかな、教えてほしいんだ」

情けなかった。結局美月さんに頼るしかなくて。

覚悟を決めて話した美月さんとは反対で、話すごとにしどろもどろになって。目も合わせられなくて。

「僕にはさ、僕には、足を引つ張ることしかできないからさ」

「美月さんの邪魔になるくらいなら、離れてしまいたくて」

「本当に、どうしたら、いいのかな」

嫌になる。あの日は反対に、僕が目には涙をにじませていた。どうしてか涙が流れてきた。こんなダメなところを見せられて泣きたいのは美月さんの方かもしれないのに。

「そうだったんですね、別れたいって言うから、私勘違いしてたみたいです」

優しい声音だった。さっきまでの美月さんの震えるように張り詰められた声とは違って、僕を安心させようとしてくれているのがわかる。

「なんでそう思ったのかはまた問い詰めたいところですけど、今はいいです」

「日向さんが自分のことをどう思ってるかは分からないですけど、私にとって日向さんに代わる人はいないですよ」

「日向さんは分かってないのかもしれないですけど、私は今でも日向さんにお世話になりっぱなしですし、いくら日向さんのお世話をしたところで到底返せたものじゃないですから」

杞憂ですよ、と。そう言ってくれていた。

納得はできない。どう考えたって今圧倒的にお世話になっっているのは僕で、美月さんが優しいからそう言ってくれてるだけなんだと思えた。

「それに損得の話じゃないですよ」

「日向さん、もしかしてこれも分かってないんですか」

「私、日向さんのこと好きなんです、えっと、愛しています、私は、幸せですよ」

突然に。それは本当に突然に。

救われた気がした。

単純な話。そして単純な男だった。

それだけで嬉しくなって、それだけで色んな罪悪感とかも溶けていくような気がした。

「逆に、日向さんは違うんですか、損得勘定で私といるんですか？」

そんなわけなかった。じゃなかったらこんなに悩まなかったんだ。

ああ、でもそういうえばそうだった。

僕らはこうして互いの感情を確かめたことがなかったんだ。

それですれ違ったんだ、思ってることはやっぱりちゃんと伝えるべきだったんだ。

「違うよ、僕も、僕も美月さんのこと愛してるよ」

顔を上げて、美月さんの目を見て、はつきりと伝えた。

恥ずかしいとか、そんなことはどうでもよかった。初めて、僕らは夫婦だって実感がわいてくるようだった。

見つめた美月さんは綺麗に微笑んでいた。綺麗な笑顔だった、本当に。

「でも良かったです、本当は日向さんが私のこと嫌になっちゃって離れたがってるのかなと思ってましたから」

「そんなことないよ、絶対ない、本当にごめんね僕が一人で考えこんじゃったみたいでさ、もっとちゃんと相談したりすればよかったね」
「良いんですよ、色々先走って考えてたのは同じみたいですから、でも」

美月さんは何か気になることがあるようだった。少し残念そうな顔をしているように見えた。

「でも、そうですね、もう大丈夫なんですよね」

「ああ、でも仕事も」

「気になることがあるなら何でも言つてよ、せつかくの機会だしさ」

美月さんが少し動揺したように見えたから、聞いてみることにした。さっきの仕事の話に関係ありそうで気になったのもある。

「なんでもいいよ、本当に今なら何でも聞ける気分です」

僕がそう言うのと美月さんはじつと僕を見つめてきた。

じつと見つめて、しばらく黙っていた。けど顔を逸らさずにじつと僕のことを見つめていた。

それからさつき話をした時とは違って、弱々しい口調で少しづつ話し始めた。

「あの日、日向さんのお話を聞くまでは、単純に一緒に仕事ができるなら楽しいだろうなって思ってたんです。お給料が上がったのも恩返しできる気持ちで、だから新プロジェクトに配置されたのも本当に嬉しくて」

「でも別れようって言われて、日向さんが離れてしまうかもしれないって、もしかしたら他の人のところに行くのかもしれないって思ってた、それが嫌で」

「日向さんを手放したくなくて、他の人と接する機会が無ければ日向さんが奪われる心配もなくて、だからプロジェクトのお仕事を日向さんに依頼したらどうかってお話もう断ってあって」

「でも日向さんがしてるお仕事関連の人は引き剥がせないから、お仕事辞めてもらえば心配も無くなるかなって思ったんです、それに私の収入で二人で生きていくことも出来そうですし」

「だけど日向さんが別れたいわけじゃないって分かったから、お仕事はやめてもらわなくても大丈夫なんです、大丈夫なんですけど」

「そこまですりもどろになりながら話して、美月さんはまた黙り込んで」

「どうやら本当に迷惑をかけたみたいだった。そうか、僕が美月さんのために思って提案したことがこんなに困らせてたのか。本当にそれは申し訳ない。」

「でもやっぱり、お仕事辞めませんか」

「ぼつりと美月さんがそう言った。」

「わかってます、日向さんを信じてないわけじゃないんです、さつき言ってもらった言葉に嘘はないって分かっています」

「それでも、不安なんです、あの日のことが脳裏をよぎるんです、どこかに行ってしまうんじゃないかって考えちゃうんです」

二年間死に物狂いで勉強していた時も、それからひたすら僕のお世話をしながらも、一度も美月さんが零したことの無い弱音だった。

僕のせいで美月さんに背負わせてしまったものだ。

僕はただでさえお金を稼ぐことでしか美月さんにしてあげられることがないのだ。

ここでこの申し入れを受け入れては、本当にただお荷物にしかならない。

でも、これは僕が美月さんに背負わせてしまったもので。これは初めて美月さんが零してくれた弱音で。これを無視してしまつては美月さんのことを好きだなんて言う権利もない気がした。

「ごめんね、本当にごめん、そこまで考えさせちゃつてさ」

ごめん、といった瞬間に美月さんが一瞬震えたように見えた。でも大丈夫だから、断るわけじゃないから。

「あのさ、他の人と接してるのが嫌なら、美月さんからだけ仕事を受けるのはどうかな」

これは折衷案だ。

美月さんはたとえ僕が何もできなくても、美月さんのそばにいれば良いと言つてくれてるんだと思う。

僕も美月さんが好きだと言つてくれたことを信じられないわけじゃないけど、それでもやっぱりお世話されるだけの負い目は振り切れるものじゃない。

だからこれでどうだろうか。これなら仕事をしつつも、接する人を美月さんだけに絞れる。

美月さんは考え込んでいるようだった。

考え込んで、珍しく表情をあちこち動かして、それから言った。

「約束してくれますか」

何か、条件があるようだった。でも多分僕の提案を受け入れてくれるようで少し安心した。

「私だけの日向さんでいること、約束してくれますか」

僕には、ひどく愛らしい約束に聞こえた。そして約束しなければそれを信じさせてあげられないことがただただ申し訳なかった。

断る理由なんてどこにもなくて、僕はそつと小指を差し出した。それでついに僕の悩ましい日々は終わりを告げたのだった。

次の日の朝、僕は少し早起きして美月さんと二人で朝ご飯を作った。

それで食後のコーヒーを飲みながら二人で少し話しをする。

二人とももう悩み事が無くなって、久々に何のわだかまりもない時間、本当の日常が帰ってきたような感覚だった。

これから先の仕事のことを相談しながら、少し気になったことを聞いてみる。

「そういえば、昨日しばらく避けてた話を急にしてくれたけど、何かきっかけになることでもあったの？」

美月さんはそれを聞くと少し意味ありげに微笑んだ。

「ええ、実は心配事が一つなくなりまして、それで思い切って話すことにしたんです」

なんだろう、昨日のこと以外に心配事があつたんなら、僕は本当に美月さんに負担をかけてしまっていた。申し訳なさを感じる、多少ましになった申し訳なさを。

「そっか、まあ心配事が一気に解決したわけだし、良かったよ、本当に良かった」

美月さんはそうですねと言って席を立った。そろそろ出勤の時間みたいだ。

「行ってらっしゃい美月さん」

「行ってきます、日向さん、約束忘れないくださいね」

「うん、わかってるよ、美月さんからくる仕事の連絡だけ待ってるから」

美月さんは嬉しそうな顔をして、ちよつと名残惜しそうに家を出ていった。

家に一人、でもこの間までとは気持ち全然違う。

癖で仕事の確認をしようとして開いたパソコンで、ゲームをしながら時間を過ごす。

仕事をしてないならせめて何か恩返しを、と思っていたついでこの間

とは別人みたいだ。

いや家事をしないのは流石にダメ人間すぎるので洗濯とかはするけど。

ああ、そうだ、またちよつと豪勢な食事でも作ろうか。

この間作ったのは結局そのあとの話で台無しにしてしまったし、仲直りのお祝いをするのも悪くない。いや喧嘩してたわけではないけど。

外はいい天気で、窓から太陽が高い位置に輝いているのが見える。それじゃあ買い物に行こうかなと、玄関に向かって、ドアノブを握って。

そして動かないドアノブに遮られた。

内側の鍵は開いている、でもドアノブは回らなかった。

ポケットに入れた携帯がメールの着信を告げる、美月さんからだ。

『ごめんなさい、でも、約束しましたもんね、ごめんなさい日向さん、愛しています』

急にここ数日の出来事がいくつか頭をよぎった。

ふと玄関の隅を見上げると見覚えのないレンズがあった。

それで急に愛おしさと負い目を感じた。

美月さんも同じような気持ちなんだろう。

負い目を感じて、感じさせて、僕はやっぱり駄目な人間だ。

でも足はもう重くなかった、多分、この足も美月さんは愛してくれそうだから。

片隅：1

特に何の日でもなかった。

部活が休みだったから友達と帰ろうとして、教室に忘れ物をしたのに気づいた。

それで友達に先に帰ってて言って言っ教室に戻った。

そして君と出会った。

変な話、同じクラスになつて二か月経つのに。いつだってクラスの全員とすぐに仲良くなるのが私の取柄だったのに。

その時初めて君と出会った気がした。

私が君を認識していなかったんじゃなくて、君が私を認識しようとしていなかったんだろう。

事実私は名前を知っていたけど、知られてはいなかった。

今だってちゃんと認識されているかは少し怪しい。

だってそれからもう一か月以上経つけど、君に話しかけられたことはまだないから。

「ヒロって本当に毎日教室に残ってるんだね、飽きないの？」

部活終わりに教室に寄っていくと、案の定窓側後ろから二番目の席に座っている男子がいた。ノートに文字を書いていることまで予想通り。

学校が完全に閉まるのが二十時で、彼は毎日その時間まで教室にいる。

「そつちの方こそ飽きないもんだね」

こちらを見もせず平坦な声で返事をしてくる。男子の中でも少し低めな声。ノートに綴る手は一切止めないままだ。

「まあ私はさつさと課題終わらせるチャンスだから、今日もよろしくね」

「課題って解ける解けないより自分で考えることが大事なんだと思うけど」

「でもほら、人に教えると力になるっていうじゃん、ね？」

「僕もまだ課題の途中なんだけど？」

「でもどうせそれ清書なんですよ？」

彼は真面目というか変な人で、どんな課題も二回するという理解不能な習慣を持っている。

一回目は解答用のノートに、二回目は提出用のノートに。

あまりにも訳の分からない習慣だから勿論最初は理由を聞いた。

「暇つぶしみたいなものだよ」って答えたつきり、それ以上は何も言わなかった。

もしそれが本当にそうなら、多分そうまでして学校で時間をつぶす理由があるんだと思う。

でもそれは聞かない。仲良くなるには、聞きすぎないっていうのも大事なことから。

「まあいいけど、じゃあどの課題からするの」

そこでやっと彼は顔を上げてこつちを見てくれた。少し長い前髪ごしに目が合って、すぐに逸らされる。

「今日何の課題が出てたっけ？」

それを聞くなり彼は黙って清書に戻ろうとする。

「わ、嘘嘘、数学、数学から教えて！」

「数学からって、何個教わるつもりなんだか」

「もちろん全部に決まってるじゃん、じゃあまず一番からよろしく！」
彼はこれ見よがしにため息をついたけど、それでも一から十まで丁寧に教えてくれた。

相変わらず教えるのが上手で、無駄に量のある課題も下校時間になるころにはきっちり終わっていた。

「何とか終わったね、ありがとう、明日もよろしくね！」

「僕に聞いてない頃の課題はいつたいどうしてたんだか、たまには自力でやりなよ」

「ヒロが教えるの上手だから仕方ないよ、それじゃあまた明日！」

「ん、バイバイ」

また明日って言うことは、些細なことだけど大事だと思う。人と？
がる最小単位の約束だから。

私は人と別れるときには大抵また明日って言うし、多分彼もそれを

分かってる。毎回返事までにちよつと間が空くんだから。

空はすっかり暗くなっていて、自転車に乗って帰っていった彼はあつという間に見えなくなった。

「また明日ね」

なんとなく呟いてみて、それから私も家に向かって歩き出す。

明日もきつと彼に課題を教えてもらう。でも私自身なんで一か月もこうして彼に教えてもらっているのかはよくわからずにいる。

別に課題を教えてもらうだけなら他の人だって良い。友達だけはたくさんいるし、頼めば特段断られたりもしないだろう。

それでも私は彼に教えてもらう。分かりやすいから？ 楽しいから？

それとも、彼のことが。

ふと浮かんだ考えを首を振って否定する。何となく顔が熱くなるのは慣れないことを考えてるからだ。

大丈夫、大丈夫、多分そんなことない。誰に対して言い訳しているのか分からないけど、なんとなく否定したかった。

私は一か月やそこらでどうにかなっっちゃうような簡単な女じゃない、はずだ。

じゃあそもそもなんで一か月も勉強を教えてもらい続けているのか、その答えはすぐには見つからなくて。

たくさん考え事をするには家と学校が近すぎた。

最初の一回、一回だけ彼が家まで送ろうかって言ってくれたのを思い出す。近くだから大丈夫って断ったら、そっかって言っただけは一度も食い下がらずに帰っていった。

家が遠かったら違ったのかななんて思ってしまった自分に気が付いて、また妙な考えが浮かんでくる。

誤魔化すように玄関の扉を開けて、声を張って帰宅の挨拶をした。やった、今晚はカレーだ。

妹が私より一足先に夏休みに入って、ラジオ体操があるんだって早起きをするようになった。

それにつられて私も早起しちやつて、朝の時間を持て余す。どうせやることもないし良いかと早めに登校すると、学校はまるで放課後みたいだった。

どの教室にも人の気配はなくて、廊下には蝉の泣き声だけが響いている。

人といるのは好きだし友達が多い方だつて自覚はあるけど、別に寂しがりなわけじゃない。一人でいるのも嫌いじゃなくて、なんなら好きの方だ。

そんな私にとって、こんな状況の校舎は妙に居心地がよかつた。日はもう昇り始めているけど、今日はまだそんなにうだるほどの暑さじゃない。

上手い具合の角度でまだ日の差し込んでいない廊下は外よりも涼しさを感じられるくらいだった。

なんとなく深呼吸をしてみると気持ちがいい。人が少ないから、二酸化炭素濃度も低いのかも、なんてテキストなことを考える。

一階から三階まで、廊下はずっと同じ雰囲気だった。

特に意味もないけど各階を端から端まで歩いて、両端の階段を交互に昇った。

教室の扉はどこも全開で、本当に人っ子一人いないことが見て分かつた。

それで最後に辿り着いた三階の一番端が私の教室だった。

そこも他の教室と変わらず、外の音だけが響いて、廊下からは人の気配なんて感じられない。

でも彼は座っていた。

背筋はまっすぐで、手元に開いた教科書を見ている。

窓側後ろから二番目。いつ見てもそこにいる彼は、相変わらずそこにいた。

下校が遅いのはここ一か月で十分わかっていたけど、登校が早いのは今日初めて知った。

多分毎日そうなんだろう。早く来て遅く帰る。先生を除けば学校にいる時間が一番長いのは間違いない彼だ。

一切触れたことはないけど、やっぱり何か事情があるんだろうか。学校にいる時間が長いというのはすなわち家にいる時間が短いということだ。

単に学校が好きなのかもしれないけど、普段の彼を見るにそういう印象は見受けられない。勉強が好きなら家ですれば済む話だし。

気にしたところでどうせ私は聞くことも出来ないだろうし、考えるだけ無駄なんだけど。

それはいいとして、朝見る彼はやけに絵になる雰囲気だった。

別に見目が特段良いわけでも、スタイルが良いわけでもないけど。ただ姿勢よく座っている姿が、完成している一つのものとして映った。

夕暮れに見る彼と何か違って、ああ、そうだ背筋のキレがいい。

放課後の彼はもう少し背中が丸まっている。多分一日中同じ姿勢で疲れが出るんだろう。思い返せば本当に彼はずっと同じ姿勢でいてばかりだし。

そんなことを廊下に立って一人考える。

見慣れたのもあつてか、どうにも彼は一人で教室にいるのが似合うように思えてしまう。

毎日放課後ためらいなく踏み入れてる空間なのに、時間を改めてみるとどうにも一歩踏み出しにくい。

ふと、我に返った。

私は何をしているんだ。教室の隅の彼を見てから急に足を止めて一人廊下で物思いにふける変人になってる。

まだ早い時間で誰にも見られないから問題はないけど。

やれ彼の姿勢一つを取って放課後との違いを考察していたのが妙に気恥しい。どれだけ彼のことを普段観察していたのかに気付かされてしまう。

「おはようヒロ、早いんだね」

彼は私の第一声の一音目に反応してぴくっと一瞬だけ体を揺らした。

「おはよう島田さん」

顔をこちらに向けて一言だけそう言うと、また手元に目線を戻す。こちらを見もしない放課後よりは若干優しい対応に見えるけど、彼は割と律儀なのでそもそも一日の最初の挨拶はきちんとしてくれるのだ。

「流石に七時に学校に来てる人はいないと思ってたからびつくりだよ、調子に乗って歌ったりしなくてよかったよかった」

「別に、歌ってたって誰かに言いふらしたりするつもりもないけどね」
実際そうなんだろうな。つもりもないというか相手がいないというか。彼が私以外の人と話してるところなんてほとんど見たことがない。

「そ、なら歌えばよかったかな、にしてもヒロは何時から来てるの？」
「さあ、時計確認してないから、校舎を開けてる先生に聞いて」

つまりそれって校舎が開くときにはもう着いてるってことか。いくらなんでも早すぎる。もしかしたら先生を入れても学校に一番長くいるのは彼なのかも。

私が驚いているのをよそに彼は淡々と手元に視線を走らせては教科書のページをめくっていく。

私も自分の席、教室の真ん中の列の一番後ろに座ったはいいけど、特にすることが無い。別に読書の趣味もないし、彼に倣って教科書を黙読する気にもなれない。となると滅茶苦茶手持無沙汰だ、徒然なるままになってやつだ、こないだ彼に教えてもらったばかり。

やたらと早く来た弊害が出る。彼と二人きりだ、いや別にそれ自体は悪くないけど気まずい。一人なら平気だけど二人以上いる中の静寂は息苦しい。

というかも彼がこうやって毎朝教科書を読んで、放課後もあんなに課題をやってるんだとしたら、教科書くらいとっくに読破してるんじゃないだろうか。彼も特にやることないけど気まずいから教科書を読み続けてたりするのもかもしれない。私が彼の一人の静寂を邪魔していたら、もし邪魔してるなら何か話題くらい提供するべきかな。

気まずさのあまりやたらと色々なことを考えてしまう。放課後は課題を教えてもらってるからこんなに気まずい静寂もないし、教えて

もらうことで既に会話が出来るから軽口をたたいたりすることも出来る。

だからすつかり彼とは気軽に話せる関係だと思い込んでいたけど、どうやら違ったらしい。課題のワンクッションを挟まないところなにも話せないものだったのか。

「あ、そういえばヒロは百花祭どうするの？」

とつさに思い付いた話題と言えば、二か月後の学校祭のことくらいだった。私の高校では毎年九月の最初の方に行われる学校祭。四日に分けて行われて、最初の三日が文化の部、最終日が体育の部だ。高校の売りになるくらいには力が入ったお祭りで、七月の最終週から準備期間になる。九月の頭の一週間も準備期間で計二週間、実際には八月いっぱい夏休みがあるから準備にかける時間はもつと長い。さらに準備期間より前から文化の部の出し物や体育の部の出場競技を決め始めるのだ。

だから二か月後の祭りの話をする事だって別に不自然なことじゃない、多分。でも彼は少しの間黙ったままだった。

「どうするって、何が」

返ってきたのは若干の困惑を含んだ声音だった。それもそうだ、いくら何でも質問が曖昧過ぎた。別に曖昧で会話のためだけの会話なんて普段のことだけど、彼に限ってはそうもいかない。普段しているのは明確な答えのある課題の話ばかりだから。

「ほら、出し物とか競技とかさ、何か考えてる？」

言いながら大差ないなって思った。結局曖昧な質問のままだ。

「特に、どうせ僕が考えても意味ないだろうから」

寂しい自虐的な答えのようで、多分事実を述べただけなんだと思う。実際彼がクラスで発言することはほとんどないから、いくら考えてもそれが形になることはない。

勉強してばつかりだから堅物なんじゃないかって思える彼でも、本当は面白おかしく軽口に返答できるユーモアはある。最近のトレンドとかが分かるかはともかく、勉強ばつかりってわけでは無いと思う。普段の軽口からところどころそう感じられる。あと皮肉るのも

お上手。

多分文化の部の出し物とかも彼なら何か面白いことが出来そうな気はしてる。体育の部は、まあ、わからないけど。

でも彼はそれを人に知ってもらおうだなんて思っていないんだろうな。知識や発想をひけらかすわけでもなく、ただ黙って座っている。謙虚なのかもしれないけど、多分他人に興味が無いんだと思う。

だから彼のそういうところを知っているのは私だけ。

友達にはそのまた友達がいる。いたって普通の話だし、特にそれに関して思うところなんてない。だけど彼の友達は私だけなのかもしれないと思うと、何だか感じるものがある。彼が私を友達と呼んでくれるのかは分からないけど。

そんな風に関係性に思いをさせている場合じゃなかった。今大事なのは会話がまた止まってしまったことで。

それから何回か簡単な質問を繰り返してみたものの、全く話が広がらなかった。彼があまりにも端的にこたえるものだから広げようがない。

何回目かの短い沈黙に頭を悩ませていると、彼が突然振り返ってこう言った。

「無理しなくて良いよ」

思わず少し身構えた。条件反射みたいなもので。

時々言われる言葉だった。いつのまにかいろんな人とたくさん話すようになって、そしたらわざと明るく振舞ってないかとか、自分の前では素でも大丈夫だからとか言われるようになった。あんまり好きな言葉じゃない。私は今の私に満足していて、無駄に色々考えてしまっていることまでわざわざ人に知ってほしいとは思わない。私が振舞う私を見ていてくれればいいのに。

だから思わず身構えてしまった。彼もそういうことを言うのだろうか。彼だってそれとなく距離をとる素振りをしてくるのに。それなりに慣れてきたら、やっぱり踏み込みたくなるんだろうか。

「あれ、違った？」

「違った、って？」

彼は私が少し顔をこわばらせたのを見てそう言った。

少しとぼけたような表情といいその発言の内容といい、私の想定から外れすぎていてついオウム返ししてしまった。違っただって何の話だ。踏み込んだ一言でも来るのかと思っただけ全然そうじゃなかった。「僕と会話するのは大変みたいで、とりあえずそう言うっておけば皆安心した表情になるから」

こんどは逆方向からショックがやってきた。

私に踏み込むとか踏み込まないとか全然そんな話じゃない。それの何歩手前だろう。

彼の言っていることは分かる。多分人への興味が薄いから誰と話してもそんなに話を広げたりしないんだろう。だから彼と会話してみようとする人たちは皆気まづくなる。まさに今の私。

ただ彼もそれには気付いているらしく、彼なりの対策をしているってことだろう。問題はそれが何の対策にもなっていないところで。

「それに、僕は別に気まづかったりしないからさ」

そこが問題だ。実際彼は気まづくないんだろう。だから無理して話さなくてもいいっていうのは彼としては気まづさへの対策になっている。

ただ普通は二人で黙っていたら気まづいものだ。相手からしてみれば根本的な解決にはなっていない。ただ単に無理して話を広げる必要が無くなって一息つくだけだ。

ただ私が受けたショックは発言そのものとは関係なくて。

問題が解決していないとかそんなことはどうでもいい。彼が私にその発言をしたことが確実に何かを抉っていった。

おかしな話。踏み込まれるのは嫌だっと思っただけなのに、皆と同じ対応をされることに傷ついている。

傷ついている？

私、なんだか変だ。彼が私をそこら辺の人と同じように扱ってきたことに傷ついている。

たった一か月やそこら課題を教えてもらっただけ。他の友達と話す回数は減ってないし、彼とだけたくさん話したわけじゃない。

だから私が何か彼に特別な思いを抱くことなんてない、ないはず。でも彼は全然人と話さないし、私とだけ特別多く話してる。だから何か私に思うことがあったっておかしくないし、少なくとも多少は慣れてくれると思うってた。

いや、いや、やっぱりおかしい。こんなこと、こんな、傲慢だ。

私、こんなこと考えたことなかったのに。皆とうまく付き合って、皆と友達で。誰も傷つけないように、私も傷つかないように。

こんな風に、誰かの特別じゃないことで傷つくなんて。誰かの特別を求めるなんて。浅ましい、傲慢な考えだ。

「あれ、島田さん、どうかした？」

何も言わない私に違和感を覚えたのか、彼が呼びかけてくる。画一的な名字にさん付けが駄目押しみたいで。

「ううん、何でもないよ」

名前を呼び返すのはなんだか悔しくて、張り付け慣れた笑顔で返事をしたけど、ちゃんと笑顔が出来てるかちよつと不安になる。

ならいいけどって、彼は少し安心したような表情とともに自分の机に向かいなおった。

そういえば、彼から話しかけてきたのは初めてだったかもしれない。内容はさておいて。

何か少しだけ違和感がある。彼、私の名字だってほとんど呼ばないのに。島田さんって呼んでくれるのも挨拶の時くらいだし。

とぼけた表情だってちっとも見たことない。もしかしたらさつきのが初めてかも。

考えすぎだ。

「無理しなくて良い」っていうのはあなたなりの距離の取り方で、私が踏み込まれたくないみたいにも彼も今私から距離を置こうとしただけなんて。

でも、私たち似た者同士だったりするかもしれない。だからこんなに気になって、だからこんなに余計なことを考えちゃったりして。

人ということを考えすぎちゃうから、人との距離を定めて、誰に対しても同じ対応を心がけて。

次から次に考えが溢れて止まらない。

多分防衛本能みたいなもので、ダメージを和らげようとしてるからだ。そうだ、そう思いたい。

そもそも彼は人とほとんど話してないんだから実は誰にも「無理しなくても良い」なんて言ったことが無いんじゃないかとか。私が初めて彼に近づいたからわざとらしく誰にでも言っただけの言葉で、そう言っただけで、距離を取られたってことは逆に言えば近づいた証拠じゃないかとか。

やっぱり考えすぎだ。人と話すときはつい考えすぎることが多いけど、群を抜いた深読み。

良い方向に良い方向に考えを持っていきたくなる。

でも実際彼は結構思慮深いタイプだし。初めの方の私なりのいつもの距離の詰め方とかは大抵わざとらしくスルーされてたし。人に興味がないんじゃないかと、人との間に保とうとしてる距離が遠いだけなら。一定距離を保とうとする私と同じような人間なら。だったら彼だって深読みするタイプかもしれないし。

それならやっぱりさっきの発言はわざとで。つてことは私との距離が近づいてきてる証拠で。

目指したい方向が決まってるせいでどう考えても同じところに着地してしまう。同じ考えをぐるぐる回る。

静かに教科書を読む彼の背中を見て、つい声をかけたくなる。振り向かせたくなる。

もし私たちが同じような人間なら、もっと仲良くなつて良い。もっと赤裸々に話したつて良い。

近づきすぎないようにしてる距離だつて、あなたとなら気にしなかったつていい。

傷ついた時に思い出した。

怒涛の勢いで都合よく進んでいく考えに、薄々気付きました。

なんでこの一か月、放課後彼といたのか。きっと自分に似たものを感じていたから。

だから興味が湧いて、だから近づきたくて、だから今背中に声をか

けたくて。

それがなんとという感情なのか、ほとんど自覚しかけていた。顔が熱くなるのだって勘違いじゃなかった。

「ヒロ、」

「おはよ紘、今日も負けかあ」

「おはよう、朱理、ついに二着も転落だよ」

「わ、ホントだ！ 七海さんじゃん、おはよう！」

「朱理ちゃん、おはよう」

無自覚に出してしまった声は、元気のいい挨拶にかき消された。

熱が出そうなくらい回転してた頭が冷水をぶちまけられたみたいに一瞬で冷えていく。

隣のクラスの女の子だ、何回か話したことがある。天真爛漫って感じの笑顔に張り付けた笑顔で返事をする。

ああ、やっぱり、やっぱりそうだ。今、はっきり自覚できる。

ここまで来るのになんだかんだ説明を付けてみたけど、そんなのいらなかった。初恋に理由なんて。

そうだ、きつとこれが恋って言うんだ。じゃなかったら、そうじゃなかったらこんなイライラしてこないだろうから。